

## トマス・アキナスに於ける 人間知性の認識構造に関して

熊地康正

### I

トマスは多くの個所で知性認識 (intelligere) が存在認識であることを述べている。<sup>(1)</sup> 即ち、知性 (intellectus) が第一に捉えるものは存在者 (ens) であり、知性への存在者の合致を表わしているのが真 (verum) であると言われる。<sup>(2)</sup> しかし、知性の第一の対象が存在者であるとしても、人間の知性認識は全ての存在者を無条件に捉えることは出来ない。<sup>(3)</sup> それでは、人間の知性認識は如何なる存在者をどのような仕方で認識しているのでしょうか。

トマスは人間の知性を身体の形相である魂の或る能力であると規定している。<sup>(4)</sup> そして、アリストテレスに従って、知性は身体との協働なしに働き得るものであると考えている。<sup>(5)</sup> しかし、同時に人間の知性が身体に結びつけられている限り、「人間の知性の固有の働きは、物的質料 (materia corporalis) の内に個的な仕方で存在している形相を、こうした質料の内に存在するものたる限りでなしに認識するのである」と述べている。<sup>(6)</sup> 従って、トマスに依れば人間の知性認識は非質料的な認識であるが、同時に質料的な拘束を受けており、そこから出発する認識に依存している。

即ち、人間の知性の認識過程は、人間の存在条件に拘束されているのであるから、それに従って認識をその完成へと高めていかなければならない。そして、この過程は事物と知性の合致と、その合致を把握するという二段階に分けることが出来る。そして、トマスはこの合致の把握に於いて存在者が捉えられると考えている。

## II

そこで、この二つの段階の各々を考える為に、先ず人間の認識の対象が一体何であるかを考えることが必要であろう。ところで、認識の対象は、現実態に於いてであれ可能態に於いてであれ、何らかの存在者でなければならない。実際、認識はそれが現実化しなければ、認識として成立しないのであるが、如何なるものといえども無 (nihil) をそれ自体として現実化することは出来ない。従って、無は認識の対象とはならない。それ故、トマスに於いて人間の知性<sup>(7)</sup>の対象は、彼の存在論の体系に従って、質料<sup>(8)</sup>の実体であるか非質料<sup>(9)</sup>の実体であるかのどちらかになる。

しかし、トマスは人間の知性は現世の生の状態に有る限り、可能的知性 (intellectus possibilis) によっても能動知性 (intellectus agens) によっても、非質料<sup>(10)</sup>の実体をそれ自体として認識することは出来ない<sup>(11)</sup>と述べている。何故ならば、トマスは「可能的知性はそれによって魂が全てのものになることが出来るものであり、能動知性はそれによって魂が全てのものを生じさせることの出来るもの」である<sup>(8)</sup>と述べているが、能動知性は離在<sup>(9)</sup>の実体ではなく魂の或る能力であり、それは可能的知性を現実化するとき現実態を生じさせる働きである。従って、人間の知性認識は可能的知性が現実態となることによって成立するのであるから、可能的知性が現実態になる為に、それに対して可能態に於いてあったところのそのものを受け取る受容能力<sup>(10)</sup>の限定を受けていると言わなければならない。それ故、能動知性の働きも可能的知性が受容的な仕方<sup>(11)</sup>で係わるのと同じ領域のことがらに、能動的な仕方<sup>(11)</sup>で係わる能力であると言わなければならない。

しかるに、トマスに依れば認識能力は認識されるべきもの<sup>(12)</sup>に対比したものである。従って、知性の認識能力と認識されるものとの間には何らかの類似性がなければならない。それ故、質料的な身体と結びついている人間の知性は、質料<sup>(12)</sup>的事物 (res materialis) を固有の対象としなければならない。この時、能動知性は質料性を伴ったものを、現実<sup>(12)</sup>に可知的なものとする働きとして捉えられる。

ところで、この時人間の知性の捉えるものは、質料<sup>(12)</sup>的事物の本質 (essentia) としての形相 (forma) である。そして、この形相は物体的質料の内に個的な仕方<sup>(12)</sup>で存在しているのであるから、トマスはこの様な形相を認識する為に、感覚の働きが必要であると述べている。実際、或る身体器官の欠陥によって、知性がその活動を妨げ

られることは明らかであるから、人間の知性認識は感覚の働きを前提しなければならぬであろう。<sup>(13)</sup>

即ち、感覚は認識対象と知性を媒介している。この感覚能力の志向的働きによって、知性認識が働く位置へと質料的事物の形相の似姿をもたらしることが必要になる。この時、人間の認識に於ける感覚の働きは、可感的なものを感覚へと刻印することにより、<sup>(14)</sup>知性がそこへ向かうことによって、知性認識を成り立たせる表象 (*phantasmata*) を形成することである。しかし、トマスにとって表象が質料的事物の似姿 (*similitudo*) であると言われる時、その似姿を質料的なものとしてのみ考えることは出来ない。

感覚は感覚器官による受容であるが故に、質料的事物との関係を持ったものであるが、感覚の志向的働きによって、可感的形相の志向的像 (*intentio formae sensibilis*) が感覚器官の内に生じる。<sup>(15)</sup> 即ち、感覚は質料的事物を捉える時、感覚を対象へと向けることにより、既に、その形相を質料から切り離して、感覚器官の内に表象を形成するという仕方で受け入れているのであって、質料的なものとして受け入れているのではない。知性と感覚に於ける認識の仕方の違いは、感覚が対象の質料的条件を伴ってその対象の形相を受け入れるの<sup>(16)</sup>に対して、知性が直接に捉えるのは種々なる普遍 (*universalis*) である。<sup>(17)</sup> 従って、表象が個的な対象とのみ関係するものであり、感覚器官の現実態としての在り方をしている限りで、可能的知性を現実態にすることは出来ない。それ故、表象の持っている個別性を抽象する (*abstrahere*) 為に、能動知性が表象へ向けられることが必要であるとトマスは述べている。即ち、それによって能動知性が表象を照らすことにより、表象は可知的志向的像 (*intentio intelligibilis*) が抽象されるのに適した状態にもたらされ、さらに、能動知性はそこから可知的志向的像を可知的形象 (*species intelligibilis*) として切り離す。<sup>(18)</sup>

しかし、人間が知性認識する時、感覚による表象の形成、能動知性による可知的形象の形成を、認識の順序に従って、場所的時間的契機としてトマスが捉えていると見るべきではない。知性的働きは感覚的働きを強めるものであり、知性は統一的な働きとして、感覚を統制することにより認識を成り立たせているのである。<sup>(19)</sup> このことをトマスは知性的魂はその内に他の全ての働きを持った魂を含んでいると述べている。<sup>(20)</sup> 従って、知性は感覚の働きを通して、感覚以上に感覚する力を持っている

とも言われる。<sup>(21)</sup>ただし、感覚の働きは身体器官に基づく働きであるから、知性は間接的な立ち帰りという仕方<sup>(22)</sup>で感覚の対象を捉えるのである。

けれども本来的に言うならば、感覚が質料的なものに係わり、知性が非質料的なものに係わるとすれば、その両者を結びつけるのは不可能なはずである。しかし、トマスはこの両者を結びつける働きとしての能動知性を指定することにより、知性の側にその原理を帰している。<sup>(23)</sup>即ち、表象は自身で可能的知性を現実化することは出来ないので、質料的事物の可感的な似姿である表象の上へ能動知性が自身を向けることにより、能動知性はその力によって、種の本性に関する限りでのその似姿を、可能的知性の内に生じさせるのである。<sup>(24)</sup>それ故、能動知性が表象を可知的なものとする働きは、単に表象の内にある形相が可能的知性の内に移されるという仕方ではなく、質料的事物の形相に対する志向的働きであり、その似姿によって可能的知性が形相づけられる種の本性としての形象を、可能的知性の内に受け取る働きである。

この様に、人間の知性が現実的に認識するのは、知性が可知的形象によって現実的に形相づけられることに基づく。<sup>(25)</sup>即ち、認識に於いて可能態である人間の知性が、可知的形象により現実態とされるのである。さらにトマスは「認識が存在するのは認識されるものが認識するものの中にある限りにおいてである」<sup>(26)</sup>とも述べている。それでは、人間の知性は何故その内に存在していない外的事物の形相の似姿と合致することにより、現実態へともたらされ、認識が現実化するのであろうか。

### III

このことを考える為には真を捉える働きとしての判断をトマスがどの様に考えているかを見なければならぬ。そこで、トマスは真を事物と知性の合致と述べているのであるから、先ず質料的事物がどの様なものとして考えられているのかを見なければならぬであろう。

トマスに依れば、人間の認識の対象である質料的事物は、その何であるか (quidditas) を成り立たせている形相が質料と複合することにより個の実体として存在している。そして、この実体が現実化しているのは、可能態としての質料に対しての現実態としての形相の働きによる。しかし、トマスはこの複合により質料的事物が

現実存在しているのではないと言う。この複合されたものがさらに存在 (esse) の働きによって存在者として現実化しているのであると述べている。<sup>(27)</sup> 即ち、質料的事物を現実存在させているのは、質料に対して現実態である形相を可能態の位置におく、現実態としての存在である。従って、人間の知性の対象としての質料的事物は、先ず存在の働きによる存在者であることによって現実存在しているのである。

それ故、人間の知性は質料的事物を、その現実化を支えている存在者の次元に於いて捉えることによってしか、真の認識に達したとは言えないであろう。けれども、人間の知性が質料的事物を認識する時、認識されているのはその形相的側面である。しかし、質料的事物を現実化させている存在の働きは、形相とは異なるものとして形相を通して働いている。トマスはこのことを質料的事物を現実存在させているのは実体形相 (forma substantialis) であると述べている。<sup>(28)</sup> 実体形相は単に質料を形相化しているのではなく、この形相を通して質料的事物が存在者として存在している様な、全ての形相に対する現実態としての存在であり、しかも、その事物の本性 (natura) を成している形相である。

従って、知性認識に於いて対象の形相的側面を捉えることは、形相を通して働いている存在により存在者とされているものを、形相的側面に於いて第一に捉えていることになる。そして、この時人間の知性は個々の質料的事物を普遍に於いて認識する。しかし、質料的事物の形相は普遍に於いて存在しているのではない。それは個々の事物の形相として存在している。それ故、人間の知性が外的事物の形相を、知性に於いて普遍的概念 (intentio universalitatis) として生ずるものとして捉えている。<sup>(29)</sup> そして、事物の形相は存在者を存在させる働きによって現実化している。この時、知性の働きによって知性の内に生じた可知的形象が、この事物の形相の似姿であるとするならば、知性はこの形象を通して、存在者としての質料的事物と関係していると云わなければならないであろう。

即ち、知性認識の働きを現実化しているのは、働きの根源に於いて形相が現実態として存在していることによるのであるから、人間の知性認識を現実化しているのは質料的事物の形相であると言うことが出来る。<sup>(30)</sup> この時人間の知性は事物の形相を捉えている限りで、その何性 (quidditas) を認識していることに於いて、その事物の形相を正しく捉えている。<sup>(31)</sup> しかし、形相を捉えることは、質料的事物を存在させ

ている働きが形相を通して働いているのであるから、存在者の存在が形相を通して働くことにより人間の知性を現実態としている、その存在者を捉えることでもある。

#### IV

この様な仕方では人間の知性にとって外的対象である質料的事物に対する認識の働きは、可知的形象の受容によって、可能的知性が現実態と成ることにより成立する。しかし、知性認識が現実化された時、それは人間の知性内の活動である。従って、知性と可知的形象との合致を把握しているとしても、それは知性の内的働きである。即ち、自己に固有な受容に対する判断にすぎず、それだけでは外的存在者を認識していると言うには充分ではないとトマスは述べている<sup>(32)</sup>。彼は知性認識がその様なものではないことを強調している。反対に知性は第一に外的な質料的事物自身を、存在者として捉えているのであってその把握を可知的形象を媒介として行っているのである。

このことをトマスは次の様に述べている。即ち、アリストテレスに従えば、働きは働くものの外に出て行く働きと内部に留まる働きとの二通りに区別される。そして、自身の内に留まる働きは、自身を現実態へともたらず働きであり、そして、その現実化を引き起こすのは形相である<sup>(33)</sup>。従って、人間の知性が現実化する為には、可能態としての知性を現実態とする形相を持たなければならない。この時、この形相が可知的形象であり、それが知性自身に直接合致するものであると言われるにしても、その形象が知性に受容される事物の本性は、個々の物に於いてしか存在していない<sup>(34)</sup>。

しかし、トマスは人間の知性が自己の外部にある質料的事物を、自己の内的認識として現実化出来るとしている。このことをトマスは「知性が事物に関して把握する形相が在るごとく、その様に事物が実際に在ることを判断する時、初めて知性は真を認識し、また真を語る。そして、それを知性は複合と分割をもってする<sup>(35)</sup>」と述べている。それでは人間の知性に於けるこの様な認識の在り方は如何なるものであろうか。

人間の知性は認識する力は持っているが、現実に認識している時にしか認識され

べき力は持っていないのであるから、<sup>(36)</sup> 可能的に知性認識しているものでしかない。即ち、認識が成立する為には、知性が現実態化されなければならない。従って、人間の知性は生成的な過程を必要とする。それ故、同時的な把握によって事物の完全な把握をしているのではない。<sup>(37)</sup> 生成的な移行の各段階に於いて、既に把握されているものと対応させることによって、一方を他方と複合し分割することが必要とされる。

そこで、この様な複合と分割は人間の知性に於いて如何なる位置を持っているのであろうか。トマスに依れば、先ず本質認識に於いて人間の知性の固有の対象である事物自身の何であるかを把握し、<sup>(38)</sup> ついで諸々な固有性、附帯性、本質に関する関連を複合と分割により把握すると言われる。ところで、この在り方は事物の存在様態に対応しているが、本来的な意味では知性に固有である。即ち、知性に於ける複合と分割は、事物に於けるそれらが形相と質料、基体と附帯性のごとく各々異なっているのに対して、差異を示しているのではなく、同一性を示しているのであると言われる。例えば、命題「人間は白い」を認識する時、「人間が白さである」と言われる様に、「人間」と「白さ」という二つの異なる存在者があって、それが結びついているのではなく、人間自身と白さを持っているものが、<sup>(39)</sup> 基体に於いて同一のものであることを認識するのであると解される。即ち、人間の知性は主語に対する述語づけを、同一性の認識に於いて捉えている。

従って、トマスに於いて人間の知性が対象を複合と分割によって捉えている時、存在者を形相に於いて捉えているにしても、既に存在者を形相的存在者として存在との同一性に於いて捉えていると言えるであろう。このことは言い換えれば、対象を存在者として現実態の次元に於いて、それが知性を現実化する根源としての存在者として捉えていることになるであろう。即ち、同一性に於いて対象を捉えることは、把握している形相を存在者の形相として捉え、そして、このことが知性と事物の合致 (conformitas intellectus et rei) を認識することであり、真を認識することであると言われる。しかも、このことは質料的事物の本質把握の次元に於いて成されているのではなく、知性と存在者としての形相的事物との差異と同一性が同時に認識される場に於いて成されていると考えなければならない。そして、この時人間の知性は存在者としての対象を把握していることの認識・判断が可能であると言われ

る。

## V

しかし、この様な存在者の認識が完成される為には、さらに自己が認識しているという反省的判断がなければならない。即ち、人間の知性が外的な質料的事物を存在者として捉えるのは、人間が自己の知性の働きを認識する時、その認識を通して自己の外的事物を認識していると判断することによる。つまり、人間の知性は自身<sup>(40)</sup>が可知的形象によって現実化し、その現実化を自己の活動として把握する。そして、この時人間の知性は自己の知性的魂を認識するという仕方では、自己の外部の質料的事物を存在者として認識し得る。即ち、人間の知性は自己の働きを通して、自己の現存を認識しているのであるが、この認識を通して他者の現存をも含むより深い意味での自己認識へ至り得るのであると考えられる。

そして、この様な認識はトマスがアウグスティヌスに従って、自己を見分ける<sup>(41)</sup> (discernere) ことによると述べているような働きの内に含まれていると考えられる。即ち、人間の知性は外的事物の形相の似姿としての可知的形象によって現実化しているのであるから、それが自己の固有の形相でないことを認識している。従って、知性は可知的形象と自身との差異性を認識している。しかし、同時に自己認識を通して、自身が可知的形象との合致により現実態にあることを認識することにより、自己と可知的形象を同一性に於いて捉えている。この自己と異なる存在者が自己との同一性に於いて捉えられることにより、人間の知性は質料的事物の形相を存在者の形相として把握することにより存在者を把握している。

しかし、このことが可能になる為には、外的対象が現実態として存在していることが必要であるとしても、<sup>(42)</sup> 外的事物の現実性を自己の現実性へともたらず内的な現実態を必要とする。即ち、可能的知性を現実態とする能動知性の光とトマスが述べている、認識を現実<sup>(43)</sup>に可能にしているより先なる現実態を必要とする。何故ならば、人間の知性が質料的事物を認識する時、知性は存在者を構成することは出来ない。従って、感覚を通して受容した事物の形相の似姿を把握することにより、事物を非構成的な存在者として捉える。しかし、その為<sup>(43)</sup>に外的事物を外的な存在者として見分ける為には、知性自身が現実態として事物に関係していなければならない。従っ



て、知性の複合と分割を通しての判断による同一性の認識に先立って、事物を把握している知性の存在が措定されなければならない。それ故、この自己の把握による自身の存在者としての認識に於いて、人間の知性は自身によって構成出来ない他の質料的物の存在を、その本質の基体として第一に捉えているのである。

しかし、人間の知性にとって構成出来ないものを対象化する為には、知性に先立って知性を存在者の認識へと至らす働きとしての力が、知性認識の成立の為に、知性の内に現実態として存在していなければならない。それをトマスは「創造されざる光の分有された似姿<sup>(44)</sup>」と述べている。そして、この分有によって人間の知性は質料的存在者とその本質把握を通して存在者として捉えている。即ち、この分有によって人間の知性は自己への立ち帰りにより、自己が存在の働きにより存在者であることの根源を与えられていることの認識に至り、この自己の現実態としての在り方を通して、それにより外的存在者を自身の知性の働きを通して把握する。しかし、人間の知性は本来的に他へ係わることにより、自己の固有の働きを通して他を認識する。それ故、トマスにとって人間の認識はその認識の仕方の固有性を通して質料的存在者を捉えているのであるが、その根源に於いて現実態としての自己の存在の働きがその認識を成立させていると言うことが出来るであろう。

## 註

- (1) *S. T.*, I, q. 5, a. 2, c. ; *ibid.*, I, q. 11, a. 2, ad 4 ; *De Verit.*, q. 1, a. 1, c.
- (2) *De Verit.*, q. 1, a. 1, c.
- (3) *S. T.*, I. q. 87, a. 3, ad 1.
- (4) *Ibid.*, q. 76, a. 1, c.
- (5) *Ibid.*, q. 84, a. 6, c.
- (6) *Ibid.*, q. 85, a. 1, c. Et ideo proprium eius est cognoscere formam in materia quidem corporali individualiter existentem, non tamen prout est in tali materia.
- (7) *Ibid.*, q. 88, a. 1, c.
- (8) *Ibid.*, Intellectus possibilis est quo est omnia fieri, intellectus agens quo est omnia facere.

- (9) *Ibid.*, q. 79, a. 4, c. トマスは能動知性が離在的実体であるが故に離在的実体を認識し得るというアヴェロイスの説に反対している。
- (10) *Ibid.*, q. 79, a. 2, c.
- (11) *Ibid.*, q. 88, a. 1, c.
- (12) *Ibid.*, q. 84, a. 7, c.
- (13) *Ibid.*
- (14) *Ibid.*, a. 6, c. トマスは感覚は固有感覚的なものに関しては偽なる認識を持たないと述べている (*Ibid.*, q. 17, a. 2, c.)。
- (15) *Ibid.*, q. 78, a. 3, c. 単なる受動ではなく、感覚が対象へ向かうことにより、自身の内にその印象を生じさせる働きとして、超物理的变化と言われる。
- (16) *Ibid.*, q. 84, a. 1, c.
- (17) *Ibid.*, q. 86, a. 1, c. a. 4, c. ; q. 85, a. 3, c.
- (18) *Ibid.*, q. 85, a. 1, ad 4.
- (19) *Ibid.*, q. 77, a. 4, c. このことに関して、トマスは感覚は知性の不十分な分有であると述べ (*Ibid.*, a. 1, c.), さらに知性は可感的物体を通して存在者に係わると述べている様に (*Ibid.*, q. 78, a. 1, c.), 知性は感覚を通して存在者自身へと向かっている。
- (20) *Ibid.*, q. 76, a. 4, c.
- (21) *Ibid.*, a. 5, c.
- (22) *Ibid.*, q. 86, a. 1, c. ; *De Verit.* q. 2, a. 6, c.
- (23) *S. T.*, I, q. 79, a. 3, c.
- (24) *Ibid.*, q. 85, a. 1, ad 3.
- (25) *Ibid.*, q. 14, a. 2, c.
- (26) *Ibid.*, q. 16, a. 1, c. *Cognitio est secundum quod cognitum est in cognoscente.*
- (27) *C. G.*, II, c. 54, (1295) *In substantiis autem compositis ex materia et forma est duplex compositio actus et potentiae : prima quidem opsius substantiae, quae componitur ex materia et forma ; secunda vero ex ipsa substantia iam composita et esse, quae etiam potest dici ex quod est et esse ; vel ex quod est et quo est.*
- (28) *S. T.*, I, q. 76, a. 4, c.

- (29) *Ibid.*, q. 85, a. 2, ad 2.
- (30) *Ibid.*, q. 14, a. 5, ad 3.
- (31) *Ibid.*, q. 17, a. 3, c. ; q. 85, a. 6, c.
- (32) *Ibid.*, q. 85, a. 2, c.
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*, ad 2.
- (35) *Ibid.*, q. 16, a. 2, c. ...quando iudicat rem ita se habere sicut est forma quam de re apprehendit, tunc primo cognoscit et dicit verum.
- (36) *Ibid.*, q. 87, a. 1, c.
- (37) *Ibid.*, q. 85, a. 6, c.
- (38) *Ibid.*
- (39) *Ibid.*, ad 3,
- (40) *Ibid.*, q. 87, a. 1, c.
- (41) *Ibid.*
- (42) *In IX Met.*, l. 10, c. 9, (1894) Et ideo ea quae intelleguntur, oportet esse actu.
- (43) *S. T.*, I, q. 87, a. 1, c.
- (44) *Ibid.*, q. 84, a. 5, c. ...quaedam participata similitudo luminis increati, ...,